

経済協力開発機構（OECD）の調査によると、日本を含めた多くの先進国において2020年におけるうつ病患者の割合がそれまでと比較して、2倍以上に増加していることが明らかとなった。2020年におけるこれら世界的な自殺者数やうつ病患者数の増加には新型コロナウイルスの感染拡大によるロックダウンや行動制限などが影響していると考えられている。

日本では、1959年に最初の抗うつ薬が上市された。最近ではセロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）やセロトニン・ノルアドレ

「麻薬」がうつ病を治す？

れた既存抗うつ薬の適正使用にも関わらず、約30%のうつ病患者が治療抵抗性（難治性）であること、既存の抗うつ薬は十分な効果を発揮するまでに1カ月間以上の慢性的な投与を必要とすることなど、うつ病の薬物治療に関して種々の問題が存在している。これらの問題がうつ病治療を妨げ、うつ病の克服を困難としている。

一方で、古くから麻酔薬として使用されてきたケタミンが、難治性うつ病に対し、即効かつ持続的な抗うつ作用を示すことが明らかとなり、画期的な新規うつ病治療薬として、2019年3月に米国食品医薬品局（FDA）によってその使用が承認された。現在では米国のみならず欧州におい

れ、その使用は厳しく制限されている。

マジックマッシュルームに含まれるシロシビンもまた、強い幻覚作用を示すことから、世界中での使用が厳しく規制されている。しかしながら、最近の臨床研究から治療抵抗性うつ病に対して即効かつ持続的な治療効果を示すことが報告された。その後、追加研究が行われ、米国FDAはケタミン同様にシロシビンも難治性うつ病の画期的治療薬になる可能性があることが発表された。既存抗うつ薬のSSRIとの比較実験においても、治療効果における優位性が認められ、現在もさまざまな臨床研究が世界中で進められている。

抗うつ薬の

開発目指す

ナリン再取り込み阻害薬（SNRI）などが開発され、うつ病治療に使用されている。これまでに開発さ



名城大学
薬学部 准教授
衣斐 大祐

ても、治療抵抗性うつ病および希死念慮／自殺企図を有する大うつ病の治療に用いられている。しかし、近年、ケタミンは薬物代謝等の理由から経口投与には不適切とされていたが、米国において点鼻スプレーが開発され、医師の監督下での使用が認められることとなった。幻覚作用や依存性を有するため、日本では2007年より麻薬と指定さ

待されている。筆者は、これら「麻薬」による抗うつ作用および幻覚作用に関する神経基盤の解明を目的に研究を進めているが、抗うつ作用に関わる脳領域をマウスの研究から同定した。今後は、幻覚作用に関わる脳領域を明らかにすることで、幻覚作用を低減させ、抗うつ作用のみを効率よく発揮する新規抗うつ薬の開発を目指したい。

いび・だいすけ 神経精神薬理学。名古屋大学大学院医学系研究科。1980年生まれ。

